

△組織▽の問題を

何処え連れて行くべきか

大会ニュースで連盟可否の問題を読んだ時ぼくは、それを「あれかこれか」の選択をせまる問題でなく、「あれもこれも」の範疇に入れて、「有るは無きにしかず」と気にしないていました。

処が、改めて可否の問題を書けノという通知を受取ってみると、おそらく大会に出席しなかった同志が、みな一寸困ったように、僕もまごついてしまった。もし僕が共産党員だったら、原理はきまっているのだからあとは方法だけとばかりに、くだらない諸事象を論理的にデッチあげて、堂々百枚の論文だって書くだろう。がアナキストとなるとそうは問屋が卸さない。なぜならアナキズムは原理の骨格や方法の荒筋が決っているだけであるのと、またもう一つには、提案や提案拒否の外面的事象からでも、提案者や拒否者の意図は分るが、重要な必理的動き乃至は諸感情を充分知りえないからです。それは大会を通じて提案者や拒否者

の肉体を媒介として、それらの綜合を直感し、可否の判断に至る決意の中に入り込むかどうかで決定されるものでしょう。

僕ははじめ連盟可否の問題を、方法の問題として考えていたので、関心がうすかったのです。が、提案者や拒否者の意図の奥にあったに違いない感情の諸要素―不安、杞憂、焦燥には初めから深い関心をよせていました。かく断言する理由は、僕もアナキストの一人として、日本アナキズム運動の現在及び将来に、それらの情緒を感じていたからです。おそらくアナキストなら誰でも感じていることでしょう。

それ故、それらの不安、杞憂、焦燥から絶望という名辞を取り出して、これを日本に於けるアナキズムの表象としていい筈だと思えます。同時に、これと並置して近代ではウナムノが最初に主張しリードが裏書した―無限の興味、興奮、好奇心から、もう一つ表象―歓喜を取りだすことは日本でも出来ると思えます。これらの表象のたいまつを持って、提案者や拒否者の肉体や精神の廊下を歩き廻りたい欲求を一寸感じはするが、ここではアナキスト一般の問題へ進みたい。かくして連盟可否の問題へも自然にふれて行きたいと思えます。

二

日本ではアナキストは雨夜の星であり、組織はなく、新聞や出版物がほとんどない現状で、

日本のアナキズム運動に絶望した第一の表象典型は、先ず最初にどうするでしょうか。おそらく彼がアナキスチックであればある程、アナキズムに本来結びついている夢想的な神秘的な部分をむしり取って、実証主義的な態度―理論の実証性が予期される結果を生み出すその能力と、観察される諸事実に対するその理論の照応性による立場、即ちアナキズム理論は、科学的方法によって試験され得る科学的な「近代科学と無政府主義」時代のクロボトキン（彼はその結論を後に放棄することをギイヨームに書き送っているのだが）の立場を取るでしょう。そして現実には首尾よく行く結果の配慮にのみ重点を置き、すでに在る社会関係の中へ這入り込み、これを改革し又は改良せんとするでしょう。

それでは第二の典型はどうするでしょうか。彼はこの世界に対する科学的知識が、この世界について吾々に告げる断定や論理は、吾々の生命や世界の基礎には全部が全部なり得ない（この意味のことを近代最初に定言したのはバクーニンであった）と考え、全く斬新な比較を絶した、結果は未知な、社会関係、秩序価値を創造し発見せんとして、無限の興奮に鼓舞されるでしょう。約言すれば、前者は革命家であり、後者は叛逆者だと云えましょう。

かく誰にも分りきったことを書く理由は、連盟の可否は、方法の問題であるよりも寧ろ原理の問題ではないかと思ひ初めた事と、又もう一つには、アナキズム原理が持つ、海の如き包容性と激動的な異質性から、それはアナキスト個々への問題だと思ふからです。

僕としては、実証主義的な結果に重点を置く志向は、成功、不成功の理論の本場―ブラグ

マキズムの日本に於けるメッカ―関西では、非常に強力な無意識的作用をしているのではないかと思うのです。かくて、結果に重点を置くその思想は、目的と方法との区別によってアナキズムをチンパにしたいと思います。共産党なら、目的を獲得するためには如何なる方便主義だつて可能でしょう。アナキズム運動をレーニン風に実践の結果をもって判断するとすれば、その活動分野は注意深く研究され、戦術は開発され、その戦略は状勢の変化によって常に變化されねばなりません。かくてアナキズムは愚昧な政党運動と紙一重のものになり下るのです。日本では幸いにも一人によつては不幸にもアナキズム運動及び連盟が振興しなかつた故にこの難をまぬがれていますが、吾々はスペインでこの事が起つたのをみました。

三

アナキズム運動が強力な社会構成力となる処では、このことは再び興つて来ることはさけられませんが、社会全体が革命的危機に捕えられた時には何時でも、アナキズムは特にアナキズム以外の構成力によって考慮せられねばならないようになってしまいます。

スペインに於けるアナキズムの実践が、半ば以上もはやアナキズムでなかつたことは『多くの観察者の一致する処となつた。ガルシャ・ブレイドは「エスパナ・リベラ」誌に書いている一連の論文で、アナキズムと革命とは一緒にに行い得ないし又行うことは不可能であつた

と述べている』（フリーダム七月十八日号）と云われています。（同志久保君はスペイン革命史の後記の中で、ペイラトの二巻の書物の翻訳について言及しているが、その早急な実現を期待する。同時に僕はフリーダム昨年六月号から十二月まで続いたスペイン革命及び同書の徹底批判を讀者にお勧めします。）

革命状態に於けるスペインに於ては、確かにアナキズムは強力な社会構成力を形成してしました。同時に強力なる敵対的な社会構成力が並置されてきました。その中でアナキズム社会構成力が発展し存続するためには、前者をもつて後者を押し流せばよいという概然論的抽象論を取らないとすれば、当然、アナキストはその社会構成力へ参入すると同時に、敵対社会構成力をたたきつづす為めに、成功、不成功の論理をぶら下げて、敵対社会構成力が用いると全く同様な権力的方法―即ちボルの手段を絶対に必要とします。勿論、これを対蹠的な偉大なドウルチーが実践し、カミュが後に理論づけた無償の戦闘的な方法があります。歴史的時間の中へ登場するのはもう少しのちのように思われます。

四

それ故に平時に於ても日本アナキズム運動及び連盟の活動を、日本共産党の組織活動の殷盛さと比較したり、あらゆる実践を歴史的時間の中で結果にばかり重点を置いて考慮し行動

することはいけないと思います。吾々はアナキズムを成功、不成功の論理でトンボ返りさせてはならないのです。

実証主義の眼から見れば、連盟はワラ人形同様、なにもしなかつたように見えるのは当然ですが、自然的な所謂、宇宙的な自覚の眼から見れば、この集団主義のお祭り騒ぎの真っ最中に、日本アナキズム運動又はアナキストが、それこそ日本に現在「在る」ことだけでも連盟のせいであり驚嘆すべきことであります。

世界の中に徐々にはあるが、陸地の浸蝕や隆起にも似た地殻的な動きで、新しい個性のルネッサンスが、アナキズム発展の基礎を築いていることが、今やはっきりと現われ始めていますから。

あわてしゃんすな諸先生方よ、僕は言いたいです。諸君はあわてるが故に、アナキズム自身の中には絶無なインフェリオリティー・コンプレックス（劣等複合）をファンダンにしょい込むのではないだろうか。そして愚昧な小市民社会の習慣や摂理の金縛りの中で全く骨化し、諸君の愛すべき家族とのトラブルを通して、諸君の中のアナキズムを益々弱小化し、終に軀身を余儀なくするようなことになるのではないか。

もう一度、日本に於いてアナキズムを名辞たらしめる時間の中を、自在に飞翔せしむると同時に、制度として時空の中にアナキズムの復権を強要するためには、日本のアナキスト諸君が、その内部に無意識に持つインフェリオリティー・コンプレックスを徹底的に聖化する決

意が必要です。丁度、ジャン・ジュネが泥棒、淫売、裏切り、凡て汚穢なるものを媒介として自己を聖化し自由を闘いとったように。

若し、ジュネでは諸君の気に入らないとすれば偉大なドウルチーをお薦めしたい。ジャーナリストのバン・ペイザンが革命政府と妥協することがファシズムを打ち倒す最良の方法だと勧めて、「若し君たちが勝利を獲ても廃墟の墨跡の上に住むことになる」と言った時、ドウルチーは言った「吾々は常に貧民窟と壁穴の中に住んで来た。吾々は如何にしてそれを住みよくするかを知っている。君は忘れてはならない。吾々も又建設することができるとを。これらの宮殿、ここスペインやアメリカや、至る処の都市を造ったのは、吾々労働者だ。吾々はより以上の物さえ建て得るのだ」と。彼もまた窮乏や汚穢を媒介として彼およびアナキズムを聖化したのです。叛逆者は、一方にその家族の小ブル的偽安泰を、他方にアナキズムをぶら下げながら歩くわけにはいかないのです。

五

以上、僕は主に倫理的な観点から話を進めて来ましたが、要するに連盟可否の問題にしても、最後は叛逆者として或は革命家としての個人の力の問題だと思えます。その源動力を何処に求むべきでしょうか、それは金でしょうか、組織でしょうか。僕は「美」の問題だと思

います。今世紀も五十年代になって、この事が益々はっきりと現われて来ました。ミゲル・ド・ウナムノはすでに三十年以前、セルバンテスの不滅の書を批判するにあたって、一切の結果の考慮を無視するスペインの表象典型ドン・キホーテを分析し、この点を力説して、カミュの「シジフスの神話」や「叛逆者」出現の用意をしてやっています。大杉時代にアナキズムに関心を持った者は、誰でも大杉を典型とする彼の行動美に眩惑され、魅了され、倫理的に目覚め、政治的な或は社会的な行動に勇躍したことはいなめないことです。吾々は古いアナキスト石川三四郎先生の「美の力学」及びわざと稚拙に書かれたに違いない「行動の美学」をもう少し謙虚に熟読すべきではないでしょうか。

最後に僕は諸君に推めたい。如何なる失敗にもめげない無分別、永遠に愛情が持つ無分別を・・・、何故ならば恋人アナキズムは今や、祭儀を求むること切なるものがあるからです。僕は連盟を思想研究会へ更衣せしむるかどうかの問題から、ずい分遠方へ諸君を御案内申し上げたろうか、僕はそうとは思わない。

(一九五三)

註記

一九五三年一〇月にひらかれたアナキスト連盟大会は、たまたま、山口英によって、緊急動議として出された(連盟組織の変更の件)。「現在の連盟は、少数の人間が単に所属しているというにとどまり、何ら組織的活動の実態をもたない。従ってその規約、綱領、運動方針等有って無きに等しい。しかも、いたずらにその形式にとらわれて、かえってあるべき初步的活動も阻害されている。これらの実態を正視するならばむしろ白紙的な出なおしを考える必要がある。すなわち実態のない連盟という名や組織を改組し、まず地方々々、個人、有志グループの第一歩的な思想研究会とか、サークルづくりからやり出す必要があるのではないか」さらに山口賢次のそれをふえんした提案「日本アナキズム運動は全ゆる意味で、新しい、これからつくりあげてゆく運動として考えねばならない。(大衆支持の度合、主体力、その思想面でも)。その実体でやるべき運動、あるべき組織は、明らかにマルクス主義運動のといった形をとるようになるのも当然だ。そのためには、

一つは、連盟を明確に思想サークルとすること(形でなくそのような認識をはっきりもつこと)。

二つは、その思想サークルにより、アナキズム思想の研究、宣伝を行う。その思想サークル

は、アナキズムという多様なものより自由共産党主義とか自由社会思想研究会とかいう名称にしその任務は、あくまで思想運動の限界にとどまること。

三つは、その研究会メンバーによる行動的、具体的な活動は他の政治組織、他の大衆組織の中で行うこと。決して大衆のものになっていないアナキズムとかアナキストの名をふりまわすのでなく、一つのフラクション活動のあり方をとる。

四つには、フラク活動のなかでえた同志を研究会に結びつけること。従って研究会は、必要によつては、一つの秘密的な非合法的なものにする必要も多いだろう」などによつて連盟組織に対する現状認識の問題を通じて、その現状が内包している根本的な命題を論議することになった。

本稿は、それを主題にし特集されたアナキズム七号へアナキズム運動の拡大強化のために、われわれはどのような組織をもつべきか✓に掲載されたものである。